

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

ハンガリー1956年における「第三の道」論

著者	南塚 信吾
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化．論文編
巻	10
ページ	55-84
発行年	2009-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/6360

ハンガリー 1956 年における 「第三の道」論⁽¹⁾

Policies of “Third Way” during the Hungarian Revolution of 1956

南塚信吾

MINAMIZUKA Shingo

1. 「第三の道」論概観

本稿では1956年のハンガリー革命にさいして、体制批判派の側から提起された「第三の道 Harmadik Út」論とそれに基づく政策を分析する。「第三の道」論の定義にはいくつかのものがあるが、本稿ではさしあたり、社会主義的原理と資本主義的原理の融合を説く思想と定義しておくことにしたい。その根本は現存の社会主義を改革しようという思想であり、何らかの社会主義を基本的には認めているものである。

実は、そのような「第三の道」論は、ハンガリーにおいては、1930年代末、第二次世界大戦中、そして戦後の人民民主主義期に、少しずつ内容を変えて登場してきたのであった。そして、1956年革命の時期に具体的に広がり、その後も1989年の大変動期を経て、今日に至るまで、ハンガリーの思想に大きな影響を与えてきている。

だが、社会主義的原理と資本主義的原理の融合を説くこのような思想は、「冷戦」の産物ではあるものの、「冷戦期」にはまじめな議論のしにくい思想であった。「冷戦」の終了したいまや、ようやくその冷

静な議論ができるようになったと言える。

このような「第三の道」論については、1980年代にドイツ在住のハンガリー人研究者ボルバンディ・ジュラの著書が出て、南塚も80年代中ごろからこの問題を扱ってきていたが、やはり「冷戦」期には史料的な制約が大きかった。しかし、最近では、史料もほぼ全面的に利用可能となり、シャラモン・コンラードの著書などが著わされて、研究が進んできている。また1956年革命自体についても、チャールズ・ガティのように客観的な研究が著わされてきている⁽²⁾。

まず始めに、ハンガリーにおける「第三の道」論の大体の展開過程を概観しておきたい。これは1930年代に始まる議論であった。

1930年代後半のハンガリーには、農村探索者 falukutatók (のちには人民主義者 népiesek)⁽³⁾ と称される人々が出現し、農民の再生を通して、ナチズムのドイツともスターリンのソ連とも違う道を模索した。かれらは1939年には民族農民党 Nemzeti Paraszt Párt を結成して、貧農を組織していった。この農村探索者のあいだでは、ネーメト・ラースロー Németh László を中心に「第三の道」論がしだいに広がるようになった。かれによれば、19世紀の合理主義は資本主義とひいてはマルクス主義を生んだ。ともに、経済的な側面が文化・精神的側面を従属させてしまった思想である。マルクス主義を中心とするこれまでの革新勢力は革命を富や労働の公平な配分としかみていない。それでは人間の根本的な病を癒すことができない。そういう状態から人間を解放する道は「質の革命」である。個人は社会からいったん離脱して、自分の解放を可能にする「島」を確立し、そこで自らの人間としての倫理的再生をはかる。この倫理的再生が「質の革命 minőségi forradalom」であり、このような革命を経た「島の共和国」が拡大されることによって「質の社会主義」が実現される。それは、民族的伝統とヨーロッパ文明を融合して作られる新しい倫理に基づく社会主義

である。それこそが、私的所有に基づく資本主義ともマルクス主義の社会主義とも区別される「第三の道」を切り開くはずである。この「質の社会主義」の担い手は、市民でも労働者でもなく、また農民自体でもなく、市民として自立した農民と農民に共感を持つ知識人である。こうした「質の革命」の客観的条件としては、国家による資本主義の徹底的抑制、官僚支配の制限、土地改革、協同組合が必要である。とくに、土地改革と協同組合によって、農民に「庭」つまり「島」を与え、農民が自己の技能と教養を高められるような「庭的ハンガリー Kert Magyarország」を実現すべきである。そこでこそ「質の革命」が可能となるのである。以上がネーメト・ラースローの議論の基本である。この倫理重視、市民化した農民の重視、「質の革命」をへた「第三の道」という議論は、30年代以後のハンガリーに大きな影響を与えたのだった。

第二次世界大戦末期の1943年8月、ソ連の影響力がハンガリーに及ぶことが確実になる情勢のなかで、ネーメト・ラースローはサルソー Szárszón で開かれた人民主義者の会議において、戦後のハンガリーを構想して、改めて「第三の道」を議論した。大戦の結果、ドイツ、イギリス、ロシアのいずれの理念が勝利するにせよ、それはハンガリー民族にとっては重い苦悩をもたらすだけであろう。戦後ヨーロッパが与える「救済」はわれわれがゆっくりと準備してきたものではなく、われわれの社会の内部事情を知らないで外から与えられるものであろう。だから、われわれはそういう救済者の「テロル」にたいして精神的な準備をしておかねばならない。われわれの歴史を再認識し、救済者でさえ考慮せざるをえないような見解を持つ人々の陣営を作る必要がある。「ニューギニアに、ニューギニアがイギリスのものになるべきだ」という一つの党があり、いまひとつの党がオランダのものでこそ幸せになれるのだと言うと仮定しよう。このとき、誰かが立ちあがって、ニューギニアはバブア人のものにはなりえないのかと聞くとしよ

う。これが第三の側なのだ。」このような見解を誰が生み出すのか。知識人である。農業労働も工業労働もしだいに知識人の労働に変わっていく。これまで、ハンガリーの知識人はあらゆるものを農民のうえに構想してきたが、これは誤りである。たしかに民族全体が由来するのは農民だが、民族全体が向かうのは、知識人の社会だ。このように論じたのだった。

この知識人重視に基づく「第三の道」論は、ネーメトの自己批判を含むものであったが、サルソーでは多くの人から批判を受けた。しかしそれでも、じょじょにこの思想は人民主義者の間に浸透していった。

戦後の人民民主主義期には民族農民党のビボー・イシュトヴァーン Bibó István が「西」の民主主義と「東」の民主主義の総合を主張して登場した。ビボーも人民主義者の伝統を引き継いで、ハンガリー民族の危機を克服する鍵を農民＝人民に求めていた。しかし、かれも農民の中に「真のハンガリー性」を求めることには批判的であった。サルソー以前のネーメトのように、農業を行う市民が理想であった。また農民の形成する古い共同体から農民をひきだして普遍的な共同体に参加させなければならないと考えた。それには土地改革と地方自治の変革がまず必要である。それがハンガリー民主主義の基礎となるのだと論じたのである。

そして、1945年以後、かれは東西の民主主義の総合をとらえた。ハンガリーにおいて、「西の民主主義」と「東の民主主義」が対立しあっている。前者は権利の尊重、多数決原理を強調し、後者は住民の直接参加する原初的組織の尊重、大衆行動の強調を特徴とする。前者においては、民主主義は一定の「手続き」、後者においてはそれは「闘争」の問題である。だが、民主主義というのは、このいずれか一つなのではない。現状においては、闘争と手続き（協調）の両方が必要だ。闘争は、公的治安、警察、経済政策などの分野で、協調は地方自治、教

育、協同組合などの分野で行われるべきだ。そのさいに、「社会主義的解決をすべき領域と、厳密に私的所有に基づく解決をすべき領域とを厳密に区別する」必要がある。こういう意味で「限定的・計画的革命」が必要であるとかれは主張した。

かれは、「ハンガリーをソ連の属国にしようとするものがあるとすれば、それは売国奴である。ハンガリーにハプスブルクを復活させようとするものがあるとすれば、それも売国奴である。また、ハンガリーはこの二つのいずれか一つしか選択できないのだという偽りの選択肢を突きつけるものは、二重の意味で売国奴である。なぜなら、この二つの選択肢のあいだに、第三の道、唯一の正しい道があるのだから。それは、国内的に均衡の取れた、しかし、ラディカルな改革政策を実行する、民主主義的で独立したハンガリーの可能性である。」「もしハンガリーにおいて民主主義的連合が機能することができれば、それは、アングロ・サクソン型とソヴェト・ロシア型の民主主義の総合として、その実践的実例として……役に立つであろう。」と主張した。

この戦後の「第三の道」論は1948年ごろまで、ハンガリーの内外で広く受け入れられたのであった⁽⁴⁾。

しかし、1948年12月に、スターリンの意を受けたブルガリアのディミトロフが人民民主主義を「プロレタリア独裁の一形態」と規定するにいたって、人民主義者の「第三の道」論は、異端視され、タブーとされていった。民族農民法も非合法化された。だが、スターリン型社会主義の「改革」を求める1956年革命の時期には、人民主義者のほかに、共産党員のなかにも「第三の道」論を掲げるものは多数現われ、そういうなかで、ネーメト・ラースローやビボー・イシュトヴァーンらが、積極的に「第三の道」論を論じ、農民諸党はそれを具体的な政策としても展開したのである。当然、この「第三の道」論は、1956年革命の敗北とともに、衰退してしまった。

面白いことに、1956年の後に成立したカーダール・ヤーノシュの体

制のもとでも、人民主義者は徹底的に鎮圧されることはなく、むしろ晩年には「名誉回復」さえしたのである。1980年代前半のハンガリーは国有企業や協同組合企業のほかに、小規模協同組合や小商業などを自由化して、市場原理を取り入れ、「第三の道」を行こうとしているかのような時期であったので、ハンガリーは「第三の道」を実現しつつあると言われたのでもあった。そして、1989年前後には、社会主義的原理と市場的原理を具体的な政策の次元で融合させられないか考える政治勢力が出てきたのだった。しかし、この時期に出た「第三の道」論は1990年に入ると、あっという間に「市場化」の大波に押し流されてしまった⁽⁵⁾。

ところが、今日またこの「第三の道」について論じられる雰囲気が見られている。それは、史料的な条件が改善された以外に、東欧の現状がそのような問題提起を求めているがゆえに他ならない。それは、世界的な「グローバリゼーション」の東欧的な現われに対する反発という意味をもっていると言える。ハンガリーの現状への怒りと、新たな「第三の道」への期待がふつふつと湧き上がってきていることが痛感されるのである。

ハンガリーでの「第三の道」論はほぼ以上のように展開してきた。断続的ではあるが、しかし、確実に継続して表面化し、国民から支持を得続けてきている思想であった。それは、「冷戦」という二項対立的な思考のなかでは議論しにくい思想であった以上、今日あらためて、正面から検討するに足る思想なのである。

以下では、1956年の時期に集中して「第三の道」論が1956年革命のなかでどのように展開され深められたのかを見てみたい。そのことは、1956年を共産党レベルとは違ったレベルで、つまり農民に関係する諸勢力の目のレベルで見ることを意味する。

1960年代に出され久しくハンガリーで権威のあった『新百科辞典』は、1956年の時期の「第三の道」論について、こう書いている。「1956

年に先立つ数年間に、修正主義者が「第三の道」という偽りの幻想を復活させた。そして、社会主義建設におけるハンガリー独自の道というデマゴーギッシュな宣伝が、1956年の反革命の最も重要なイデオロギー上の武器になった。⁽⁶⁾これほどに「第三の道」論は無視できない影響力を持っていたのである。このような位置づけをされた「第三の道」論とは、具体的にはどのようなものであったか。

本稿では、1956年革命のなかでの「第三の道」論の展開過程を追いかけてつ、ビボーとネーメトの思想を少し立ち入って検討することにする。この展開過程を検討する際に、1956年のハンガリーを国際情勢のなかで位置づけつつ、「第三の道」議論の展開を見ることにしたい。ただしあらかじめ注意しておくならば、1956年当時について言えば、「第三の道」論は後世からの分析概念であり、同時代にこの言葉が広く使われていたわけではない。

2. 「希望」の10月

1). 10月23日まで

ハンガリーでは、1956年2月にソ連共産党20回大会においてフルシチョフがスターリンを批判した「秘密報告」やその後のポーランドのポズナンでの労働者暴動などに刺激されて、それまでのスターリン型社会主義への批判の動きがじょじょに現われてきた。

既に述べたように、1948年以後、民族農民党が非合法化され、人民主義者も発言を抑えられていた。しかし、人民主義者だけでなく、共産党員のなかにも、「第三の道」論に惹かれているものは、多数存在した。共産党のなかで、戦前戦中をハンガリー国内で過ごしたもののなかには、このような人々が多く、党の指導層にもかなり見られたという。「共産党の多くの指導者たちでさえ、この伝統（「第三の道」）の影響を受けていた。とくに、人民学寮と関係があり、後にペテーフィ・

サークルで活躍した指導者たちがそうであった」⁽⁷⁾。そして、ソ連共産党20回大会ののち、ハンガリーでは、「作家同盟」と「ペターフィ・サークル Petöfi Circle」が、そうした「第三の道」論を考える人々の再登場の場となったのである。

20回党大会ののち、1956年3月17日にハンガリーの党内に1848年革命期に活躍した若き詩人ペターフィ・シャーンドルにちなむ「ペターフィ・サークル」が結成され、6月に一連の公開討論会が開かれた。これは「人民学寮」に関連していた党員が指導していた。特に6月18日の集会では、1949年に粛清されたライク・ラースローの夫人ユリアも参加して、夫の名誉回復に協力を求めた。6月28日には、作家のデーリ・ティボル、ロションツイ・ゲーザが大胆な党批判を行った。これに対して、党は6月30日に「ペターフィ・サークル」の集会を禁止した。しかし、秋になるとポーランドの事件の影響を受けて、「ペターフィ・サークル」の活動は再度活発化していた。

この間、1945年にできていた「ハンガリー作家同盟」が、9月17日に大会を開いて、新しい幹部会を選出した。そこでは共産党に近いダルヴァシュ・ヨージェフらが抜けて、タマーシュ・アーロン、ベンヤーミン・ラースロー、デーリ・ティボル、ハーイ・ジュラ、ネーメト・ラースローらが選出された。いずれも戦前の「農村探索者」と民族農民党の流れを汲む作家（人民作家と呼ばれた）たちであった。「第三の道」論者のネーメト・ラースローは地方にいて、大会に参加はしていなかったが幹部会に選出された。そしてこの大会は、非スターリン的な党指導者ナジ・イムレの政権復帰を要求した。さらに10月3日には、イエーシュ・ジュラ、フェーヤ・ゲーザ、コドラーニ・ヤーノシュ、ネーメト・ラースロー、サボー・パール、ヴェレシュ・ペーテルなど、「第三の道」論に近い人民作家が、そろって新しい機関誌『イーラーシュ（手稿）』の発行許可を求める要求を党に提出した⁽⁸⁾。

こうして、10月までには、「第三の道」論を掲げる勢力が広く参加

した「ペテーフイ・サークル」と「作家同盟」がその活動を活発にしてきたのである。

2) 10月23日

こういう情勢のなかで、10月22日から23日にかけて行われたブダペシュト工業大学の学生集会は、長い討議の末、「16項目」の要求をまとめた。その主なものは、①すべてのソ連軍がハンガリーから即時に、講和の諸決定に基づき撤退すること、②ナジ・イムレ同志を指導者として政府を刷新すること、③複数政党制のもとでの普通・平等・秘密の選挙、労働者のストライキ権の保証、④ハンガリー＝ソ連間と、ハンガリー＝ユーゴスラヴィア間の政治的、経済的、文化的関係の検証と、政治・経済の完全な平等および相互不干渉の原則に基づく再編成、⑤専門家の参加によるハンガリーの経済全体の再編成、わが国の計画経済に基づく経済制度全体の再検討、⑥工業で用いられているノルマの完全な修正、労働者の最低生活水準の保証、⑦供出制度の即時撤廃、生産物の合理的利用、個人で経営する農民への平等な援助などであった⁹⁾。

これらの要求自身は「第三の道」的ではない。経済面で言えば、いわば、それまでのソ連型社会主義経済の原則のうえで、計画やノルマを見直し、個人経営の農業支援を盛り込んで、いわばその原則を改良するものでしかなかった。市場原理や資本主義の活用はもとより入っておらず、とくに所有に関する変更の要求はまったく含まれていなかった。それはたしかに当時としては大胆な改革要求であったが、このあと、ナジの政権ができると、現実の改革はこの要求を乗り越えて急速にレベルを高めていくことになる。

このような要求を揚げつつ、10月23日には、学生、労働者、市民の大集会が開かれた。それは市内でのデモになった。これに対する政府の対応のまずさもあって、夜には市内で暴動がおきたのであった。

3) ナジ政府のプログラム：10月24日－30日

10月24日にナジが首相に任命された。しかし、ナジの署名なしにハンガリー政府の要請としてソ連軍の介入が求められ、ソ連軍がブダペシュトに出動することになった。それに対して、市内では市民の抵抗が始まった。その混乱のなかで、ナジは、25日にラジオで放送を行い、改革プログラムを約束した。その内容は、ソ連軍の撤退とソ連＝ハンガリー関係の見直しのほか、広範な民族的・民主的勢力を結集した形で、政府を刷新し愛国人民戦線を復活させることを含んだ「広範で根拠のある改革プログラム」となるはずのものであった⁽¹⁰⁾。しかし具体的な内容はまだ提示されていなかった。実は、ソ連指導部はこの放送を分析して、ナジは信頼できるものと判断していた。だから、これのプログラムはソ連側で是認されたのだと判断される⁽¹¹⁾。ソ連から派遣されたミコヤンらは、ナジを支持して、ソ連の軍事介入を抑えていた。そのような情勢下でナジの改革は準備されていった。

10月27日、ナジ政府が発足した。だが、このときまで、ナジは、蜂起した市民や労働者と直接的な接触はまったく持たず、わずかの取り巻きと討議を重ねていただけであった。しかし、28日にはかれは、一変することになる。ロシオンツィ・ゲーザやドナート・フェレンツらの改革派は街頭での市民や労働者の要求を直接的に受け止めてきていたが、それはナジにようやく理解されるようになったのである。

そして、10月28日、ナジはラジオ放送によって、既に約束した「広範な改革プログラム」の一部を発表した。それは、経済面の改革を対象としていて、賃金、ノルマ、年金の是正、住宅問題の改善、労働者評議会の承認、農業集団化の際の不法の是正、協同組合と個人農の活性化などをうたっていた⁽¹²⁾。ここでは、二つの点が注目される。まず農業集団化の際の不法の是正ということは、集団化が強制的に行われたことの是正ということの意味を意味していて、農民の集団農場からの離脱の自由ということを明言していたわけではないが、そのように解釈

されて、農民の集団農場からの離脱が生ずることになった。また、10月24日に組織され始めたばかりの労働者評議会⁽¹³⁾を早くも承認していたのであった。

ついで、10月30日には、ナジはもう一つ重要な宣言を発した。それは、政治面での改革を目指して、一党制を廃止し、1945年に存在した連立諸党の民主主義的共同に基づく内閣を作ること、小農業者党、民族農民党、社会民主党などの連立諸党を加えてあらたなインナー・キャビネットを作ること、現場でできた民主的自治組織を承認することを盛り込んでいた⁽¹⁴⁾。このあらたなインナー・キャビネットが連立内閣と言われるようになるものであった。また、現場でできた民主的自治組織を承認するというのは、労働者評議会や革命委員会などのことを指していると思われる。これは、一党制の政治体制の基本を脅かすはずのものであった。

こうして、ナジ首相は、それまでのスターリン型社会主義を突き崩す経済的・政治的改革を綱領として示すことになったのである。以上のナジの改革綱領は、前述の学生たちの「16項目」をはるかに越えて進んでいた。それは基本的には1945-48年当時の人民民主主義のハンガリーを再現させようというプログラムであって、事実上「第三の道」の政策を示したものであった。それは彼を取りまく、ロシオンツィら党内改革派の影響のもとに作られた綱領であった⁽¹⁵⁾。

はたしてソ連指導部がこうしたナジの政策をじっくりと検討する余地があったのかいなかは不明であるが、しかし、10月30日にはナジの諸政策を支持する「宣言」を発したのであった⁽¹⁶⁾。

4) 最初の「第三の道」論

ビボー・イシュトヴァーン

この間、本来の「第三の道」論者は事態の動きに立ち遅れていた。

その遅れを取り戻そうとしたのがビボー・イシュトヴァーンによって10月27-29日に書かれた『草稿』であった。それは、彼としては1956年10月の過程で「第三の道」論をはじめて展開したものであった。

かれは、一方では、社会主義と共産主義は、人類の経済的解放の一形態ではあるが、それは容易に専制に陥りやすい形態であり、社会主義の成果はそのなかでどれほど自由を効果的に向上させたかによって測られるのだと考えていた。他方で、資本主義の問題は、自由な企業体制にあるのではなく、所有関係の不公平、つまり、自由な企業活動の可能性が社会のごく一部の者にしかないということにあると考えていた。

そして、「西欧では政治的経済的安定が進み、所有関係の不公平がなくなりつつあるが、そのことが、植民地・半植民地の抑圧を強くしており、そこでは大地主と大資本の収用なしには自由な発展がありえないのだ」と見た。反面、ロシア革命ではこのような収用が行われたわけである。だが、ロシアでは、「その後は収用した大企業を官僚制にゆだねるのではなく、労働者の共同財産にすべきであった。そして、すべての人のために、平等な条件を作って自由な企業制度を始めるべきであった。こうすると、自由な企業と大企業の労働者共同所有の二つができ、資本主義と社会主義の対立が残るのだが、それは、さらに二つのやり方で終わらせることができる。それは、自由な企業活動から始まる協同組合制度によって、もう一つは自由な個人経営である。だが後者は、個人的な成果が協同の企業につながり、企業で働くものが企業内民主主義と企業利益へ参加し、ついには共同財産ができるという限りにおいて認められる。こういう形態は、半植民地経済を経験した国で（ハンガリーだけでなく、ポーランド、チェコスロヴァキアでも）有効であり、それらは、植民地諸国に「実例」を示すことになる。植民地では西欧の影響と実例は有効ではないのだから。」と言う。従って、ハンガリーで実現すべきは、個人的な成果が協同の企業につな

がり、企業で働くものが企業内民主主義と企業利益へ参加し、ついには共同財産ができるという限りにおける自由な個人経営なのである。

ただしかれは農民問題については、やや別に考えていたようであり、「とくに農民を立て直さなければならない。集団化にも、自由な経済競争にも基づかない、農民のための社会的・法的組織を作らなければならない。農民はマルクス＝レーニン主義の社会思想のなかでは最も大きな悩みの種である。ポリシェヴィズムは、自分の規格に合わせて、農民を扱ってしまった（プロクルステスの寝台）」と批判し、それとは異なった道を模索するべきであると主張したのである⁽¹⁷⁾。

全体としてビボーは、社会的に所有された企業と私的に所有された自由な企業との共存を考えていたという意味で、「第三の道」を考えていたのである。しかし、これとてもいまだ理論的な構想にとどまっており、革命の事態に影響を与えるような具体性は持っていなかった。

ただし、この『草稿』は、当時は公表されず、公表されたのはビボーの死後であった。したがって、当時においては、人民主義者ら本来の「第三の道」論者の側では、「第三の道」論の具体化は著しく遅れていたのだった。

農民諸党

10月30日のナジの宣言をうけて、1945年当時の諸政党が再建されていく。復活した諸政党はその綱領で程度の差はあれ「第三の道」的な政策を打ち出した。小農業者党は、10月31日に「臨時執行部のプログラム」として、「26項目」の改革を掲げた。それは、ワルシャワ条約機構からの脱退、ソ連軍の即時撤退、中立、新しい連立政府と憲法、宗教の自由、勤労農民に土地を返還、工場と土地を資本家には渡さないこと、供出制度の廃止、集会・結社・言論の自由、労働者が自由に作る労働組合、小工業・小商業の自由などを盛り込んでいた⁽¹⁸⁾。

これは、工場と土地の人民的所有を維持しつつ、他方で私的農業、

小工業、小商業を認めたという意味で、「第三の道」そのものであった。それは現存社会主義の原則の上での改良ではなく、私的所有原理の導入による、現存社会主義の改革であった。だが、小農業者党らしく、農民への土地返還によって富農の支援をもくろむものであった。それゆえ小経営の協同組合化が提起されていないという特徴を持っていた。

同じく10月31日に再建された民族農民党（ペターフィ党と称した）は、綱領を打ち出すのに手間取っていて、ようやく11月1日に党書記長ファルカシュ・フェレンツがラジオ放送を行い、ワルシャワ条約からの即時脱退についての国民投票、中立についての国民投票を3日以内に行うこと、民族中央評議會を結成して、議長を音楽家のコダーイ・ゾルターンとすることを提議した⁽¹⁹⁾。

これは小農業者党に比べて、具体性に欠けた提案であって、まだ「第三の道」的な内容を持たないものであった。

この点ではむしろ、キリスト教民主人民党や社会民主党がよりはっきりとした立場を表明していた。10月31日にキリスト教民主人民党は綱領を採択し、宗教の自由などを要求したほか、小経営の自由と私的所有の保証を求めるが、「大企業、鉱山、大銀行の国有」は維持せよと主張していた⁽²⁰⁾。また、11月1日には社会民主党ケーティ・アンナが『ネーブサヴァ』の社説で、工場、鉱山、土地は人民の手に残すよう、要求していた⁽²¹⁾。

こうして、「第三の道」論を基本的に掲げるペターフィ党の具体化面での遅れはあるとしても、連立各党は、ニュアンスの違いありながらも「第三の道」論をとっていた。

だが実は、この間にハンガリーをめぐる国際関係に大きな変化が生じていた。まず、10月31日にソ連指導部が、軍事介入へと政策変更を決定していた。この転換には、10月30日にブタペシュトの共和国広場

でおきた悲劇的事件⁽²²⁾が大きな影響を持ったとされている。だが、ナジらにはこの転換は知らされていなかった。また、10月31日午前インナー・キャビネットの開催中に「英仏のエジプト攻撃」のニュースが届いた。ナジは「西」に見放されたように思ったと言われる。そういうなかで、11月1日にナジがラジオ放送において、ワルシャワ条約機構からの脱退と中立を宣言した。そして、その日、カーダール・ヤーノシュ、ミュニツク・フェレンツが行方をくらます（ソ連へ連れられていった）のである⁽²³⁾。

5) ペテーフイ党の綱領

しかし、当面、ハンガリーの政治諸勢力はこうした国際情勢の変化を考慮し（でき）なかった。そういうなかで、ようやくペテーフイ党が改革の綱領の具体化を模索し始めた。

まず、ネーメト・ラースローがそれに貢献した。11月1日にラジオで講演を行い、10月23日以来、ハンガリー人は「倫理的な高揚」を示した、ここに「第三の道」にそった大きな前進の可能性がある、ただ怖いのは右からの脅威であると語っていたネーメトは、「第三の道」の具体化を試みた（この放送は翌日11月2日の『イロダルミ・ウーイシャーグ（文学新聞）』に掲載された）⁽²⁴⁾。

11月2日に『ウーイ・マジャロルサーグ（新しいハンガリー）』に掲載された「党と統一」と題する論文で、かれは「第三の道」の政策をつぎのように提言した。

（1）「ハンガリーは過去10年間に社会主義の方向に大いに前進した。事実上社会主義国家になった。旧体制の打倒を願うあまり、このことを考慮しないのは誤りである」。現在あるところから出発し、しかるべき方向に前進しよう。

（2）ハンガリー人民の古典的作品に体现された願望からすれば、われわれは社会主義に固執すべきである。ハンガリーの作家や思想家

のなかで、社会主義に反対であった者はいない。対立は、我々の社会主義が外国のパトロンの忠実な模倣であるべきか、一般原則をハンガリーの自然や経済状態に適応させた応用であるべきかというところにあるのだ。

(3)「ハンガリーが、いかなる権力（大国）集団にも参加しないということは、承認できないことだろうか。そうではない。」「われわれは、しだいに中立を目指す国々の仲間に関係を持ったのであり、我々はそのなかで場所を見出すことができるだろう。わたしは、ポーランドや自由へ進みつつあるドナウ流域諸国や多様な諸民族を念頭に置いている。これらの諸民族は、ポーランドやユーゴスラヴィアのような社会主義国であったり、古くからの理念に拠りながらも社会主義と近い体制へと進んでいる国（インド）であったりする。ソ連のなかの諸民族にも我々は敬意を表するだろう」。

以上のような状況の評価の上で、ネーメトは、諸政党が共通の宣言をして、社会主義の大きな原則について同意せよと主張した。その原則とは、

- a) 農民への土地の返還。ただし、25 - 40 ホルド（1 ホルド = 0.57ha）以上の土地は不返還。
- b) 工業と商業の企業の経営と所得への労働者の参加。緩やかで自発的な「ぶどう生産組合」的な協同組合の促進であった⁽²⁵⁾。

このネーメトの論文のなかには、多くのことが詰め込まれている。彼は社会主義を信奉していた。しかし、ソ連型とは違うそれを求めている。したがって、1956年が反社会主義になることは望まなかった。かれは、ハンガリーの労働者、農民、知識人は骨の髄まで社会主義者であるとも述べていた。そしてネーメトは当面の国内的、国際的な諸条件のなかで社会主義を活かす道を考えたのである。それは「第三の道」であった。小生産の活用、その協同組合化、労働者の経営参加な

どの導入による、それであった。そして「中立」ということと「第三の道」とを繋げて考えていた。「中立」を目指す国際的な諸勢力との連携のなかで、「第三の道」を実現しようとしていたのである。

これは、社会主義の基礎は無にしないで、小経営と組合制度の融合を進める道である。ただし、農民への土地返還により富農支援をもくろむ小農業者党にたいして、土地所有の限界を設定し⁽²⁶⁾、加えて小経営の協同組合化を取り入れて小農業者党との違いを明確に示していた。また労働者参加が出てくるのも注目される。私的企業の要素を取り入れつつ、それに協同組合という枠をかける。また国有企業制などを認めるが、労働者参加によって、その民主制を保証するというものであった。

社会主義を否定しないで、民族独自の道を模索するのというのは、ペテーフイ党の共通の意見であった。

ペテーフイ党の中心人物のひとりであった人民作家のフェーヤ・ゲーザも、11月3日の「新しい民族理念」(『ウーイ・マジャロルサーグ』)において、「第三の道」論を展開し、ハンガリーの小スターリンであったラーコシの時代は否定するが、戦前の権威主義的支配者のホルティ時代に戻ることは考えないと述べた。そして、農民問題について、「土地は返さない。‐復古‐は考えない」として、「一家族が自力で耕作できる限りを、小土地経営の限度としよう。」また、「自由な結社に基づく協同組合制度を農民生活の全ての分野に設けよう」と提案していた⁽²⁷⁾。これはネーメト・ラースローの提案と一致するものであった。さらに、タマーシュ・アーロンも、同じ11月3日の(『ウーイ・マジャロルサーグ』)において、これまでハンガリーには強制によって「外国の理念と形態」が押し付けられていた。「われわれの民族的伝統の精神に合致せず、人民の多数にとって見慣れない」ものであった。これが1956年に崩された。いまや、われわれの民族的伝統の精神にそったものを打ち立てるべきだと述べていた⁽²⁸⁾。

しかし、この時期のペテーフイ党の指導者達の発言も、まだ漠然としていると言わざるをえない。ペテーフイ党のなかではまだ綱領がまとまらず、依然としてネーメトやビボーに依存する状態にあったのである。

3. 「闘争」の11-12月

1) ビボーの「第三の道」論

11月3日、ナジの新しい連立内閣が組織された。共産党以外では、ペテーフイ党からは、ファルカシュ・フェレンツ、ビボー・イシュトヴァーンが入閣し、小農業者党からはティルディ・ゾルターン、コヴァーチ・ペーラ、B. サボー・イシュトヴァーン、社会民主党からケーティ・アンナらが入閣した。

この日の夜、ファルカシュ・フェレンツは、ラジオ演説において、ペテーフイ党は、これまでの社会主義的成果から、自由で民主的で社会主義的な国として利用できるものは維持すること、中立の達成後もすべての社会主義諸国と友好的な経済文化関係を維持すること、あらゆる無政府的・反革命的方向に反対することを明言していた⁽²⁹⁾。これが、連立内閣の大勢であったと思われる。

しかし、翌11月4日早朝、ソ連軍が第二次介入のために首都を占拠したため、この内閣は2日の命しかなかった。代わりに、ソ連軍とともに現れたカーダール・ヤーノシュが政権を獲った。

ソ連の戦車が国会議事堂を包囲したとき、前日国務大臣に就任したばかりのビボー・イシュトヴァーンは国会に残って、「ハンガリー人よ」と題するアピールを書き上げた。それは、ハンガリーは反ソ的な政策を採るものではないこと、自由で、公正で、搾取のない社会を作ろうという東欧の諸民族の共同体のなかで生きていきたいと願っていること、ハンガリー革命はファシスト的でも反ユダヤ的でもないこと、そ

して、ハンガリー革命は階級や宗教に関係ない全人民の参加によるものだということを主張していた⁽³⁰⁾。「自由で、公正で、搾取のない社会」というところに「第三の道」的な色彩がうかがわれる。

その後、国会議事堂を脱したビボーは、11月6日に「ハンガリー問題の妥協的解決の計画」と題する草稿を書き上げた。それは11月9日には、「ハンガリーの情勢についてのスピーチ」としても発表された。

彼の現状分析はこうであった。ソ連軍がいるかぎりハンガリー側の抵抗は続く。そして、現在のカーダール政府はソ連軍が撤退すると崩壊するだろう。ハンガリーではすでに一党制の社会主義は崩れ、複数政党制によらなければ統治はできないだろう。逆に、資本主義的、反共産主義的、超保守的な復古の危険はあるが、そういう復古は、ソ連や共産党にとってだけでなく、多くは社会主義者と考えている青年や労働者や兵上にとっても、問題なのであり、国内政治の自由な発展を妨げるものである。したがって、結局、「社会主義の成果を、自由な制度の保証と結びつけるような解決方法」が必要であり、それは、多くの人民的な民主主義勢力の模範となるだろう。

以上のことを考慮して、ビボーは、以下のような「妥協的形態での解決」を提起した。

- a) 政府の出発点は、11月3日にできた最後の合法的ナジ政府とする。
- b) 対外的には、ワルシャワ条約機構から脱退し、全欧的な平和安全保障体制に入るか、ソ連との二国間協定を結ぶ。
- c) ソ連軍は段階的に撤退する。
- d) 革命的憲法制定議会を開いて、のちに普通選挙を行う。制定すべき憲法の内容は、国家形態としては1946年の共和国制度であり、統治形態は1948年の意味での独立した議会制民主主義とし、社会形態は搾取を排除した社会主義とする。選出された少数の質の高い専門家と選出された非専門家による地方自治の再編成。政教分離。

e) 国連軍はソ連軍が撤退しない場合か重大な事件がおきた時に必要であるので認める。

では、ビボーは社会主義の成果を自由な制度の保証と結びつけるような解決方法、つまり搾取を排除した社会主義とというものを、どのように構想していたのか。かれの以前の主張からの発展は何か。

その主張する社会形態は社会主義であるが、大幅に私的要素を取り入れていた。すなわち、20～40ホルドを限度として1945年の土地改革を維持すること、鉱山・銀行・重工業の国有を維持しながら、工場の労働者管理・労働者参加・利益参加を実現すること、搾取のない形での個人的・組合的自由経営を保証すること、搾取のない形での私的所有の自由を認めることを掲げていた⁽³¹⁾。

これは基本的にはネーメトと同じ主旨の「第三の道」であった。土地改革の維持、銀行と重要産業の国有の維持、労働者参加、小農民の育成という点では、ネーメトと共通であった。だが、ビボーが「搾取のない自由経営、私的所有」を認めていた点で、協同組合を重視するネーメトとは違いを見せていた。また、ビボーが地方自治の民主化を強調することも特徴であった。一方でかれは労働者評議会に言及していないが、それはこの提案が「妥協」のために作られていることから来ているのであろう。11月4日以後、労働者評議会こそが、最も徹底してソ連軍・カーダール政府と戦っていたからである。

これは、1956年革命のなかで最も体系的で具体的な綱領であった(12月4日に、「追加」が出る⁽³²⁾。)そして、これは、11月14日の大ブダペシュト中央労働者評議会創立大会において、ビボー自身によって発表され、同評議会がカーダール政府と交渉するための基礎として採択されることになった。このような「第三の道」のラインの綱領が、最も革命的な労働者評議会においても受け入れられたという事実は、きわめて重要であった。つまり、改革派と蜂起派(労働者評議会)をとおして一定の対抗プログラムが「第三の道」として一致して採択され

たということを意味するのである。

のちに1990年に初めて公表されたネーメト・ラースローの当時の言によれば、「ハンガリーの革命が反革命に移行するという私の不安は現実にはなかった。」「ハンガリーの労働者、知識人、学生は……骨の髄まで社会主義者である。もし介入が2、3日遅かったならば、ハンガリーのすべての党は社会主義の成果の維持ということについて共通の宣言をまとめえたであろう⁽³⁴⁾。」

たしかに、ビボアの綱領は既存の社会主義を乗り越えてはいたが、決して「反社会主義」的ではなかった。まさに社会主義の改革なのであった。

2) 農民党の「第三の道」政策

このようなビボアの綱領に刺激されて、諸政党の側でも、綱領のいっそうの具体化と、相互の調整が行われた。まず、農民諸党の綱領が作成された。ペターフィ党は11月13日に綱領を発表した。それは、カーダールの労農革命政府に対抗して「国民統治評議会」をつくり、音楽家のコダーイ・ゾルターンを議長とすること、メンバーは労働者評議会、2つの農民党、連立諸党、知識人革命委員会、学生革命委員会、武装勢力、作家同盟とすること、共和国と議会制民主主義をたてること、搾取のない社会制度を作ることをめざしていた。そして、1945年の土地改革、工場・鉱山の共同所有のような社会主義の成果は守りながら、人民の自治やその他の民主的手法によって、社会主義をさらに発展させるというものであった⁽³⁵⁾。これは、社会主義と自由主義、社会主義と私的原理を融合させた「第三の道」であった。

同じく、小農業者党も11月16日に綱領をまとめた。それは、ペターフィ党が掲げた「国民統治評議会」を、カーダール政府も認めたうえで作ることと呼びかけ、その議長は討議で決めるとしていた。人民共和国という名称を放棄するとしていたが、そのことは国家の社会主義

的性格を否定するものではないとされていた。

国の民主的・社会主義的発展のための梃子として、a) 1945年の土地改革の維持、b) 鉱山・銀行・工場の国有化の維持、c) 民主的共和国、d) 工場・企業の労働者管理に基づく国有・共同（協同組合）所有の保証、e) 個人農、小工業、小商業の所有権の保証と、自発的で自由な協同組合の維持、f) 社会主義的な公的倫理の枠内での私的所有の自由、g) 政教分離のもとでの、自由な宗教活動と教会の願望の承認、h) 労働者階級の組織活動の自由、労働保護、労働保証などが、掲げられた⁽³⁶⁾。

これも、社会主義と自由主義、社会主義と私的原理を融合させた「第三の道」にはかならなかった。ただし、同党の10月30日の綱領と比べると、労働者管理と協同組合を追加する一方、自由な土地所有を掲げることはやめていた。また、労働者評議会について直接に言及することはしていなかった。この綱領は小農業者党内のコヴァーチ・ベーラ、ティルディ・ゾルターンらによって作成されたもので、人民主義の流れを汲むものであって、これまでより「第三の道」的であった。二つの農民党の政策は相互に影響しあっているのである。

その後、この二つの党の政策を合体させる方向での動きが作家同盟によって進められた。11月28日に発表された作家同盟の覚書「10月23日に起きたハンガリー革命とその帰結についての覚書」は、カーダールの労農革命政府の成立とスエズ事件の勃発を含めた詳細な情勢分析ののちに、ハンガリー革命は以下の5点をその成果としたと確認した。

- (1) 労働者評議会の設立と自治
- (2) ストライキの承認
- (3) 農民の生活形態の自由な選択
- (4) 農民の義務供出制度の廃止
- (5) 一党独裁の廃止

そして、これらの成果は、労働者、農民、知識人が一緒になって行

う「社会主義のハンガリーの出発点」であるとした。

そのような確認のうえで、作家同盟は以下のような提案を行った。

- a) 革命諸勢力の集まる革命統治評議会を作ること。議長はコダーイ・ゾルターンとし、最初の宣言で社会主義の成果を固守することと、社会主義を民主主義的手段によって発展させることをうたうこと。
- b) 革命統治評議会は、自由な選挙による国会と社会主義の成果を守りそれを民主的に発展させる憲法を作ること。
- c) 革命統治評議会は、国連のメンバーとしての義務をまもり、ワルシャワ条約機構の見直しをすること。
- d) 革命統治評議会は、ソ連及びソ連軍と10月23日以前の状態まで軍を引き上げるよう交渉すること。
- e) 革命統治評議会は、すべての外国と平和、友好、経済・文化関係を維持発展させること。いかなる大国もハンガリーを戦火の基にしてはならない⁽³⁷⁾。

これは基本的に「第三の道」論であった。少し細かく見るならば、ここでは、労働者評議会とストライキが出てくる。労働者評議会については、ナジは早くにこれを承認しているのに人民主義派を含む農民諸党は、小農業者党の遅れから、これの承認が遅く、ようやくこの時点で承認したわけである。また、労働者評議会が行っているストライキは、この時点で、人民主義派がこぞって承認したことになる。こうして、労働者評議会の動きと人民主義派の動きが、ソ連の介入、カーダール政府の出現という状況のなかで一致してきたのである。

このような作家同盟のイニシアティヴを受けて、農民党2党の共同綱領「ハンガリーの国家的、社会的、経済的制度的基本的原理および政治的發展の道について」が12月8日に発表された。

それは、前文において、国の独立と自由を守ること、これまでの社会主義の成果を保証し、革命的民主主義的成果を制度化すること、そういう成果としては、労働者評議会の設立と完全な自治、労働者のス

トライキ権、農民の生活形態の自由、強制供出制度の廃止、一党独裁の廃止があることを「基礎」として確認した上で、以下の基本原則を掲げていた。

国内の政治については、

- a) 民主的に選挙された国会、独立した司法、法の前の平等、出版・意見の自由、宗教の自由。
- b) 共産党の容認。
- c) 臨時国民統治評議会の設置。1957 年秋に国会選挙。

経済については、

- a) 生産手段の大部分の社会的所有。鉱山・工場・銀行・大企業の社会的所有の維持。
- b) 1945 年の土地改革の維持。所有上限を設定し家族労働で耕作できるかぎりとする。
- c) 農民や小工業者の自発的協同組合その他の団体の承認。
- d) 一定の枠内での私的経営の自由。
- e) 労働者その他の自発的組合の承認。
- f) 国営企業の従業員が労働者評議会をとおして企業の経営・利益分配に参加することの保証であった。

そして、ソ連の政府にたいし、ハンガリー人民の民主的活動に誠意を持って答えるべきであり、無責任な情報に惑わされて間違った情勢判断をするなど要求していた。ハンガリーの革命諸勢力は一致して社会主義を支持していて、復古の動きには反対していることを正しく認識せよというのである。上のような方法で国内の秩序を打ち立てたあと、ハンガリーはソ連軍についての交渉などをするとしていた⁽³⁸⁾。

ここに「第三の道」の最終的な政策像が完成したのである。社会的所有に開かれた私的所有の一定の自由、私的原理を包み込む「自発的

協同組合」、そういう形での労働者や農民の自発性の鼓舞、これが「第三の道」であった。それは、農民党諸党が一致し、それを人民主義者が支え、労働者評議会が承認したオルターナティヴであった。すべての革命勢力が、社会主義の成果の維持、その民主的な発展ということを語り、それを基本路線としていたのである。

11月4日にソ連の戦車が首都を軍事的に制圧したが、実際には労働者評議会が経済運営上の権力を握っており、政治的にはなお、カーダール政府と革命勢力の側の間でやり取りが行われていたわけで、このような農民党の綱領は真剣に考慮されるに値するものであった。事実、カーダールはこれらの綱領に一定の考慮を払わざるをえなかったのもあった⁽³⁹⁾。

4. 「第三の道」論の意義

今日、1956年革命を冷静に見直してみれば、1956年の改革派のほとんどは、そう自称するか否かは別として、「第三の道」論者であった。当時の「スターリン型社会主義」を批判するとすれば、そしてなお、資本主義への復帰を拒否し、社会主義を維持するとすれば、それ以外にはなかったと言える。ひょっとしたら、アナルコサンジカリスト的なオルターナティヴはありえたかもしれない。しかし、それは現実の力にはならなかった。ナジの当初の政策はまさに「第三の道」であった。

だが、1956年革命のなかで農民党系の「第三の道」論による政策の具体化は遅かった。たとえば、ペテーフイ党の場合、理念的には早くにビボーなどのよって提起はされていたが、政策としての具体化は遅かった。

上述のように、具体化してきた「第三の道」の政策は、社会主義的な要素と個人的原理と市場的原理を混合したもので、決して反社会主義的ではなく、当時のハンガリーの現状を改革するには妥当な面を多く持っていた。もちろん、革命のなかで新たに展開されてきた要素、

たとえば労働者評議会、革命委員会などを組み込んだ「第三の道」、言い換えれば、諸政党の連合を超えた「第三の道」は、結局展開されずに終わったが、こうした民衆組織を基礎にした「第三の道」が提起されていたならば、さらに興味深かったであろう。

1956年に現われた「第三の道」の具体的政策を、権力者たちがもう少し冷静に分析できていれば、56年の悲劇はなかったし、社会主義はもっと豊かになったかもしれない。

たとえば、ソ連指導部はハンガリーの何を考慮して軍事介入を決めたのだろうか。「第三の道」の政策は、ネーメトの主張や、ビボーの「妥協」策や、農民党の合同綱領に見られるように、慎重に社会主義の成果を守り、資本主義には戻らないというラインを守っていた。そのことをソ連は認識していたのだろうか。それについて十分な審議をして介入を決定したのだろうか。今日新に得られるようになった史料から見ると、ソ連指導者の議論は専ら政治情勢、しかも共産党の動静に限定されており、運動の背後にある思想にまでは目が及んでいなかった。これと同じ問題は、軍事介入を説いたユーゴスラヴィアのティトーらの指導部の議論にもあてはまる。

1956年末に成立したカーダール体制は公的には「第三の道」を「異端」とし、人民主義者を一時は弾圧したが、1960年代半ばにはかれらと妥協した。そして、むしろ事実上「第三の道」論の一部をつまみ食いしていく。たとえば、農業生産協同組合とは区別された農業組合の創設などがそうである。また、1980年代ははじめからの小規模協同組合や小企業の容認がそうである。

歴史における「もしも」ということは語るべきではないかもしれない。しかし、歴史におけるさまざまな可能性は考えておいていいことであろう。もし、1956年にハンガリーで改革ができていれば、例えば、「第三の道」的なラインで改革が進んでいたら、社会主義全体のその後の性格は変わったのではないか。1956年が「スターリン型社会

主義」を改革することに成功していれば、それが他の社会主義国にも影響して、ソ連世界は変わっていたかもしれない。1968年のプラハや1980年のポーランドの改革はやりやすかったに違いない。なによりもソ連の体制自体が改革されていたかもしれない。そして、世界中の社会主義にもっと弾力性が与えられたかもしれない。1956年の教訓が生かされていれば、その後の社会主義世界全体がもっと柔軟に発展できたかもしれず、1989-91年はなかったかとも、考えられる。1956年ハンガリーのあのような結末（軍事弾圧）をもつことによって、ソ連圏全体が硬直化し、社会主義の「自己改革」はできなくなったのである。

今日求められるのは、1950年代に「第三の道」を考え得たような思想的弾力性・構想力であろう。もちろん、1956年に提起されたような「第三の道」は、1950-60年代には機能したかもしれないが、1980年代以降のIT化時代、経済のグローバル化の時代においては、そのままの「第三の道」ではありえなかった。21世紀においてはさらにそうであろう。グローバリゼーションが進行するなか、資本主義の矛盾と近代市民社会の矛盾を乗り越えるには、どういう「道」がありえるのだろうか。

注

- 1 本稿は、1956年のハンガリー革命から50年の今年10月21 - 22日に、法政大学国際文化学部の企画として行われたシンポジウムでの報告をもとに、シンポジウムの成果を取り入れて、まとめたものである。
- 2 南塚信吾『静かな革命』東大出版会、1987年、Borbándi Gyula, *A Magyar népi mozgalom*, Püski, Bp., 1989; Ständeisky Éva, *Az írok és a hatalom, 1956-1963*, 1956-os Intézet, Bp., 1996; Salamon Konrád, *A Harmadik út küzdelme -- Népi mozgalom 1944-1987*, Korona kiadó, Bp., 2002; Charles Gati, *Failed Illusions*, Woodrow Wilson Center Press/Stanford U.P.2006.
- 3 農村探索者とは、農村や農民出身の知識人が、農村や農民の中にこそハンガリー民族の基盤があると考え、農村と農民の過去と現状を社会誌的に描き留める運動をした人々である。かれらは後に「人民主義者」と呼ばれるようになった。
- 4 南塚信吾『静かな革命』東京大学出版会、1987年
- 5 南塚信吾『ハンガリーにおける「第三の道」』岩波書店、1991年
- 6 *Új magyar lexikon*, 3. Akadémiai Kiadó, Bp., 1962. p. 208.
- 7 Bill Lomax, *Hungary 1956*, Allison & Busby, London, 1976, p.51. 人民学寮というのは、戦間期に若い労働者や農民に大学教育を受けるのを援けるために創られたものであるが、その後共産党のカードルを育成するのに使われた組織である。その雰囲気は、民族的な共産主義のそれであって、人民主義の影響を強く受けていた。
- 8 Salamon Konrád, *A Harmadik út küzdelme*, p.195.
- 9 II. Osiris, Bp., 2000, *Magyar történeti szöveggyűjtemény 1914-1999*, p.103-104.
- 10 Paul E. Zinner ed., *National Communism and Popular Revolt in Eastern Europe*, Columbia UP., New York, 1956, pp.416-418.
- 11 Charles Gati, op.cit., p.173
- 12 *Magyar történeti szöveggyűjtemény 1914-1999*, II, pp.110-111.
- 13 Bill Lomax, op.cit., p.139-140.
- 14 Zinner ed., op.cit., p.453-454.
- 15 カードル・ヤーノシュでさえ、10月30日には「ソ連からも、その他の型の共産主義からも」独自の「第三の路線」について語っていた。Bennett Kovrig, *Communism in Hungary From Kun to Kadar*, Hoover Institution

- Press, California, 1979, p.307.
- 16 Charles Gati, op.cit., p.179.
- 17 Bibó István, Fogalmazvány, in *Bibó István összegyűjtött munkái*, 3. Az Európai Protenstans Magyar Szabadegyetem, Bern, 1983, pp. 869-878.
- 18 *Magyar történeti szövegyűjtemény 1914-1999*, II, pp. 113-114.
- 19 Ibid., pp. 126-127; *Századvég*, 1989.1-2, pp.141-142.
- 20 *Magyar történeti szövegyűjtemény 1914-1999*, II, p.115.
- 21 Ibid., pp.125-126.
- 22 10月30日、共和国広場に面したブダペシュト市共産党本部が群衆に攻撃され、党員等が「虐殺」された事件をいう。真相はいまだ不明である。
- 23 Charles Gati, op.cit., pp.186-194 ; 10月31日から11月1日にかけてのソ連指導部の会議では、もっぱら政治情勢の分析が行われていた。*Magyar történeti szövegyűjtemény 1914-1999*, II, pp.118-119. この時期にブダペシュトからモスクワに送られる報告も、モスクワでの諸決定も、そのような政治情勢に関するもののみであった。これについては、A "Jelcin-dosszie" - *Szovjet dokumentumok 1956-ról*. Századvég, Budapest, 1993 を見よ。
- 24 Németh László, Emelkedő nemzet, in *Németh László munkái: Életmű szilánkokban, Tanulmányok, kritikák, vállomások*, II. K., Magvető és Szépirodalmi kiadó, Bp., 1989, pp. 189-192
- 25 Németh László, Pártok és egység, in Ibid., pp. 189-192; *Századvég*, 1989.1-2., pp.141-142.
- 26 1945年に発布された土地改革法は、大都市周辺では50ホルド、それ以外では100ホルド以上の土地を有償で収用することになっていたから、ネーメトの提案はこれよりも厳しく大土地所有を制限しようというものであった。
- 27 Főja Géza, Új nemzeteszme, in *Századvég*, 1989.1-2., p.142-144.
- 28 Salamon, op.cit., p.219
- 29 *Századvég*, 1989.1-2, p.144.
- 30 Bibó István, Magyarok!, in *Századvég*, 1989.1-2., p.145; *Bibó István összegyűjtött munkái*, 3, pp. 879-880.
- 31 Bibó István, Expozé a magyarországi helyzetről, in *Századvég*, 1989.1-2, pp.146-148; Tervezet a Magyar kérdés kompromisszumos megoldására, in *Bibó István összegyűjtött munkái*, 3, pp. 881-884.
- 32 *Századvég*, 1989.1-2, pp.156-158
- 33 Bill Lomax ed., *Hungarian Workers' Councils in 1956*, Atlantic Research

and Publications, New Jersey, 1990, xl-xli, pp.207-212.

34 Salamon, op.cit., pp. 224-225.

35 Feljegyzés az október 23-án kirobbant Magyar forradalomról és következményeiről, in *Magyar történeti szöveggyűjtemény 1914-1999*, II. pp.225-226.

36 Ibid., p.226.

37 *Századvég*, 1989.1-2, pp.150-155.

38 Nyilatkozat Magyarország állami, társadalmi és gazdasági rendjének alapeleveiről és a politikai kibontakozás útjáról, in Ibid., pp.160-162.

39 Bill Lomax,op.cit., p.155.